

# 古典との出会い（2）

## — 中学1年「宇治拾遺物語」の授業から —

金子 直樹

本稿は、「中等教育研究紀要」前号(第55巻)に発表した「古典との出会い— 中学1年「竹取物語」の授業から —」の続編である。古典を読むことを通して、学習者が相互に読みを交換しながら、自分の意見を変容させてゆく授業構成や教材編成を試みた、その報告である。

### 1. はじめに

本稿は、前稿に続き、2014年度広島大学附属福山中学校1年生の古典の授業から、今度は主に2学期に実施した「宇治拾遺物語」を扱った記録である。古典を「伝統的な言語文化」という枠組みの中に押し込めてしまうのではなく、今を生きる生徒たちが将来にわたって自己を振り返り、他者との関わりを持つための学習にすることを旨としての実践報告である。

前稿で報告した「竹取物語」の場合と同様に、学校図書教科書「中学校国語1」では、「とらわれた心につき立つ矢」という刺激的なタイトルを与えて「宇治拾遺物語」104段「獵師、仏を射ること」が教材化されている。本稿は、この教科書の挑発に乗って、さらなる発展型を目指した試みでもある。

なお、本稿者は06年度以来、8年ぶりに中学1年生の授業を担当した。前回06年度には、当時における当校の研究開発「新サイエンスプログラム」の中心テーマであった「リテラシー」に焦点を当てて104段を扱った(当校研究紀要第47巻)が、今回は別の切り口での試行である。

### 2. 単元の概要

#### ①指導時期と時間数

週1時間の授業を「古典」の時間として、1年生2学期の13時間(週)を充てた。

#### ②教材と指導方法

取り扱った章段は、順に以下の通り。

- ・32段「柿の木に仏、現ずること」
- ・104段「獵師、仏を射ること」
- ・16段「尼、仏を見奉ること」
- ・24段「厚行、死人を家より出だすこと」

この4話について、全文を教科書の体裁に準じた傍訳形式の本文プリントに作り、重要な古語や古典語特有の表現などを「言葉の整理」として別プリントに整理して、教科書を離れた授業とした。

生徒の学習活動としては、本文音読と、意見や感想を「書く」こと、友だちの書いたものを「読む」ことを中

心に据えた。場面の整理や登場人物の心情などを発問と板書を用いて整理する、いわゆる「読解」は極力行わなかった。生徒に対しては、互いの感想を読み合うことで「みんなで「読み」を確認する」授業だと説明をしたが、指導する側としては、クラスの意見交換から自分の読みを深める相互作用として「尖った意見を共有する、他者の鋭い意見を基に自身の意見を更新する」ことをねらいとした。

### 3. 第1講「柿の木に仏、現ずること」

#### (1)授業の実際

第1時は、範読と斉読とを繰り返し、目と耳と口で本文になじんだ後、「この文章を読んで分かったこと、考えたこと」という題で初発の感想を書く(B5半分)。

第2時は、前時の初発の感想をクラス全員分まとめたもの(B4表裏)を読みあい、「注目すべき友だちの意見」として3名分を選び、その理由(評価コメント)とともに書く(B5)。

第3時は、前時の「投票」結果の発表として、投票理由(評価コメント)全員分をまとめたものを読みあい、クラスでの読みの中心を明らかにする。

#### (2)生徒の反応と指導の方法

第1時の初発の感想では、「大きな柿の木の上に仏が現れたが、右大臣は不思議に思い確かめに行った。ずっと見ていると、仏は、最初は仏だったが最後には死にかけの鳥となった」など粗筋を記している者、「この話は、京中の人々が仏だと思っていたのは、くそ鳶だったという話である。つまり、人が言っていることを素直に信じない方がよいという教訓を表している話だと思う」という教訓としての理解を記している者が大部分であった。

しかし、クラスには40名もの生徒がおり、中には読みの手がかりに触れたものもある。第3時では、そういう手がかりをすくい上げながら、読みの方向を確認していった。例えばA組では、

- ・11(出席番号、以下同じ)「この話で僕は、仏は迷信なのか、それとも居るのかという点で悩んだ。右大臣はこの世の末に出るはずがないと言って、仏の存在は否

定しなかったが、実在していることは否定したからだ」という初発の感想が、「注目すべき意見」として、以下のような評価コメントを22票集めた。

- ・「○(原文は生徒名、以下同じ)君の意見の「仏は迷信なのか、それとも居るのか」というところを読んで、考えが深まった。仏というのが想像の中に作り出したものなのか、存在しているものなのかよく分からないなかで、右大臣は存在していることは否定しなかったが、柿の木の上に実在することは否定した。右大臣も○君と同じようなことを考えていたのかなと思った」
- ・「仏が存在するかもしれないという意味が、右大臣の服装に表れていることが分かった。もし存在した時にと考えると、右大臣は賢いと思った。また、右大臣は仏の存在を否定しているのではなく、仏の実在を否定した。右大臣も少しは仏を信じているのかなとも思った。この物語には深い意味があることが分かった」

この、初発の感想とそれに対する評価コメントとの応答とをクラス全体にフィードバックするなかで、本文の右大臣の描写「日の装束うるはしくて、檳榔の車に乗りて、御前多く具して集まりつどひたる者ども退けさせて」の意味を確認した。また、C組では

- ・12「京中の人達は、馬や車をばらばらに置いて急いで押したが、右大臣は車もちゃんと駐めて、落ち着いて行った。そしたら仏が偽物だとばれたので、右大臣の頭の良さが分かったという話だと思う」
- ・38「人々に崇拝されるようなもの(仏)が、いきなり現れるのはおかしいのに、人々は疑いもせず参拝している。右大臣は、自分が今見ていることは本当に真実なのか、自分で確かめないといけないと思った」

という初発の感想に対して、次のよう評価なコメントがあった。

- ・「○君は、右大臣は京中の人達のように馬や車をばらばらに置かず、ちゃんと駐めて落ち着いて行ったことに注目して書いていた。右大臣は仏かどうかを疑ったことだけでなく、仏だった時のための保険をかけたということからも、賢い人であることが分かる」
- ・「僕は、右大臣が最初から全て見抜いていると勘違いをしていた。この物語は、右大臣が賢いというよりも、疑いがあるのなら自分で確かめたら結果がよく分かるようになるということ、○さんの意見を読んで気付かされました」

この応答に注目し、クラス全体に共有させることで、「京中の人、こぞりて参りけり。馬・車も立てあへず、人もせきあへず、拝みののしりけり」という本文表現に戻って、右大臣の描写との対比を確認した。

第3時の読みあいの重点は、「何か鋭いことに気づいた優秀な人」である初発の感想記述者を称揚することに

あるのではない。その記述を選んだみんなの読みの傾向を確認すること、他者の意見に賛同することで自分の読みの変容を確認することにある。それが確認できるように誘導してゆく、生徒の意見の出し入れが重要である。

## 4. 第2講「獵師、仏を射ること」

### (1) 授業の実際

第1時は、最初の範読の途中、普賢菩薩が姿を現す部分「見れば、普賢菩薩、白象に乗りてやうやうおはし、坊の前に立ち給へり」でいったん止めて(本文プリントを、ちょうどこの部分までで表面が終わるように作っておき、「はい、ここでストップ。裏を見てはいけません」とゲーム的な指示を出す)、①「この後、お話はどのように展開するのかという予想を、なぜそのように予想するのかという理由も含めて、記述しなさい」という課題で書く。その後、最後まで範読して話の全体像をつかんだ後、斉読を繰り返す、②「自分の予想が当たったのかどうかの判定も含めて、この物語の主題をまとめなさい」という課題で書く。

第2時は、前時の課題への記述をクラス全員分まとめたものを読みあい、「柿の木に仏、現ずること」と「獵師、仏を射ること」の両者に共通するテーマ・問いかけについて書く。

第3時は、前時の「二つの説話に共通する問いかけ」への記述をクラス全員分まとめたもの(B4表裏)を読みあい、クラスの読みの方向を明らかにする。

### (2) 生徒の反応と指導の方法

第1時の「予想」に関して、B組では全40名中、

- ・予想以当たった…15名

(その内、結末を知っていた者、教科書で読んでいた者は9名)

- ・予想が外れた…25名

となった。外れた予想内容のうちで主なものは、「普賢菩薩が聖と獵師に、何かほうびをあげると思う。聖は、「一心に法華經の教えを大切にしてきたご利益」と言っているから、そのご利益として何かほうびをあげるのではないか」、「実は、寝てしまっていて夢で見たのだったとか、聖に呪文をかけられていた、という結末になると思う。「聖」という名前が、いかにも特別な力を持っているそうだから」というものであった。

また、①予想と②主題に関して、「柿の木に仏、現ずること」のように「前に読んだ話と同じように」などと前話との共通性を明確に記述していたものは26名であった。

第2時で、互いの予想・感想を読みあった後で、「二つの説話に共通する問いかけ」という枠を与えて書かせた

結果は、「物事を疑わずに初めから鵜のみにする人は無知であり、欺されたり損をしたりするが、物事を疑い、疑心を持つ人は真の賢者であり、ウソを見破ったり得をしたりする。これは、地位にとらわれず、どの人にも共通することである」という、「疑うこと、信じすぎないことの大切さ」でまとめた者が大部分であった。

ところで、クラスに一人だけ、

- ・22「人々が拝んでいたものは実は本物ではない偽物で、それを気付く者もいる。多くの人が拝んでいるものにとやすく乗ることの、愚かさ、人間の醜さ、人の心の移りやすさ。本当に信じられることは、どうやって見つけるのだろうか？」

という自分への問いかけをも記述していた生徒がいた。

第3時では、その生徒に「あなたが納得できる意見は」と尋ね、クラス全体にも拡げて「彼女の問いに対する答えになっている意見は」と選ばせたところ、

- ・5「仏や経を大切にするのはよいことだが、自分たち人間の目に見えるものではないということ。目に見えないからこそ、遠くから人間の行いを見ている。だからこそ信仰を集めるのであって、一般人にどやどやと拝まれたり、経を大切にすると見えたりするような存在ではない、ということ」

- ・31「どちらの話でも偽物である仏の正体が暴かれる。しかし暴くのは一人だけで、周りの人たちはみな仏のことを信じていた。筆者は、このような人たちの考えの浅さ、周りに流されやすい部分について書きたかったのだと思う。筆者は、実際に普段の生活で流されやすい人たちを大勢見ていたのかもしれない。だからこの物語を通して読者に「人はどのようなものなのか」というようなことを問いかけたかったのだと思った」という意見が、クラス全体の読みのまとめとして浮かび上がってきた。

古典の世界を、「迷信の恐ろしさ」や「懐疑の大切さ」という現代的な意識で簡単に処理することだけが「理解」することではない。生徒の具体的な感想・意見・疑問に基づいて、物語・説話の世界に身を置いて考えてみることで、読みがいつそう深まる。そのように生徒の意見を出し入れし、組み立ててゆくことが重要である。

## 5. 第3講「尼、地蔵を見奉ること」

### (1) 授業の実際

第1時は、第2講と同じ形で実施した。範読の途中で、「ぢざう」が姿を現す部分「童、楯を持って遊びけるままに来たりけるが」まででいったん止めて(本文プリントを、ちょうどこの部分までで表面が終わるように作る)、

- ①「この後、お話はどのように展開するのかという予想

を、なぜそのように予想するのかという理由も含めて、記述しなさい」という課題で書く。その後、最後まで範読して話の全体像をつかんだ後、斉読を繰り返し、②「自分の予想が当たったのかどうかの判定も含めて、この物語の主題をまとめなさい」という課題で書く。

第2時は、前時の課題への記述をクラス全員分まとめたものを読みあい、「物語のテーマ(作者が主張していること)と、問いかけ(私たち読者が答えなければならないこと)とを考える」という題で、書く。

第3時は、前時の「テキストの主題と、読者の主体」の記述を読みあい、クラスの読みの方向を明らかにする。

### (2) 生徒の反応と指導の方法

第1時の「予想」に関して、学年全体では全122名中、

- ・予想が当たった…21名
- ・予想が外れた…101名

となった。予想が当たった理由は、「この童は、ただの子供に見えるが、実は本物の地蔵だった。理由は、今までは見た目仏のニセ者だったが、今度は見た目子供の本物だと思うから」、「その童は実は本当の地蔵菩薩だった。それは、今までの話ではだます者の正体があらわれていなかったけれど、この話は博打の正体がばれているから、今までとは逆になっていると思うから」というものであった。外れた予想101の内訳は次の通り。

- ・「本物の地蔵ではなかった」だけで、話が終わる…11
- ・尼が欺されたことに気づいて(嘘が暴かれて)、話が終わる…42
- ・博打が痛い目にあって、話が終わる…8
- ・尼がぢざうを本物の地蔵だと思い込んだままで、(尼は結局欺されたまま)話が終わる…15
- ・その他  
(尼がぢざうを殺す、ぢざうが尼を殺す、など)…21
- ・予想がつかない…4

第2時に「テキストの主題と、読者の主体」を意識して書かせた結果は、第3時のプリントでは「作者の主張について」「読者の理解について」というテーマで分類して読ませた。

### 「作者の主張について」

- ・A14「今までの話とは違い、自分の信念を貫けば現実になるという話だった。この物語は、信じた者が欺されたという話ではなく、最後まで心に深く念じればあり得ないことでも起こるかもしれないということだと思ふ」
- ・A29「当時、仏などの存在は尊すぎるものであったため、身近に現れれば疑う者や興奮してしまう者など様々であった。仏を信じるということは、仏に会うことに希望を持っているということで、皆そのような希望を心の底に抱いていた」

- ・ B20 「僕は、千年前の物語を読んで、これらの物語は全て仏教(地蔵や仏)が関係していると思った。また、昔の人々は、現代の僕たちよりも仏や地蔵に対して興味があったのではと思った。どの話もおもしろく、現代文学とは違った形で構成していた」
- ・ B23 「信じていけば必ず幸せは訪れるが、そこにたどり着くまで、さまざまな困難がある。それらをうまく退け、強い信念を持ち続けなければいけないということを伝えたいのだと思った」
- ・ C21 「現在とは違いこの作品の時代は、仏や神を心から信じる人がほとんどだった。それなのに偽物を登場させそれを見破らせたのは、たとえ信仰を邪魔する偽物が現れても、いずれは偽物がばれ、信仰を続ければいつか報われると伝えたかったのだと思う」
- ・ C34 「この物語の作者は、仏がどうして自分の回りにいるのか考えることが大切だと言っているのではないかと思う。現れるはずのない状態で本物を見ることはできないし、深く信じて、見れると確信していれば見ることができる」

#### 「読者の理解について」

- A13 「「尼、地蔵を見奉ること」の主題は、意志を貫き通し実行すれば良いことが起こるといことだと思ふ。最初は、深く信ずれば仏も現れるということだと思つたが、それは千年前の人にとっては当たり前のことだから」
- A40 「千年前の人、仏を強く信じていた。しかし、本当に自分が間違いなく生きていて、命を賭けるくらいの人、仏に会えるのだから、正しい行いをしなさい、ということを書いているのだと思ふ。しかし、今は仏をあまり強く信じていないと思ふ。だが、その頃の人をおかしと思ふのではなく、間違いなく生きるということを私達は受け止めないといけないと思ふ」
- B4 「仏が存在することなど、昔は、今では考えられないようなことが信じられている。しかし、人とのつきあい方、努力の報い、失敗など、今も昔も変わらないこともある。だから、その物語の主題からそのような教訓を読み取って、今後の人生の糧にすればいいと思ふ」
- B14 「仏教を深く信じると、本物であれ偽物であれ信仰の対象が現れる。まず第一に、信仰は大切であると説いている。また、冷静な思考力を持つ者は、それが本物か否か判断できる。冷静な思考力は大切だとも説いている」
- C5 「僕は、この物語の主題は「深さ」だと思ふ。今までの話に出てきた信ずる者というのは、考えや信仰の深さが、尼と比べるとかなり浅かった。作者は、尼の信仰の深さと、生きてきた長さに敬意を払っているから、このような話になつたのではないか」
- C38 「作者は、「仏」とはどういうものなのか、また、仏と関わっていく中で見えてくる人間の賢さや愚かさについて問いかけているのだと思ふ。世の中にはいろんな人がいて、いろんな考え方があることも伝えたかったのだと思ふ。(仏を信じている人の中にもいろんな人がいるということ)」
- 今回の第3時では、悉皆掲載するのではなく、テーマ毎にまとめることで、意見の共通点、読みが収斂する方向を意識させることにした。
- また、以上のような「まとめ」の枠を超えた、物語の周縁部に着目した意見も取りあげた。
- B5 「思つたことを信じるかという点におき、この三つの作品は重ならなかつた。しかし、一つ目に出てきた大衆、その後の聖、博打などが、問題を解決する人を導いている。また、その人たちの予想は外れている。そこが重なっている」
- C31 「「深く信じれば本当のことになる」といことだと思つていたが、実は違ふのかも知れない。この物語には、少年が地蔵である根拠が全く示されていない。普通なら何の理由も無く名前だけで信じ込んでいる尼の方がおかしい。前の二つの物語は、結果として信仰の対象が偽物だったが、信じていた人には本物に見えていたはずである。偽物だったが、人々には何の実害も与えていない。むしろ、そこにいるということだけで気持ちの支えになることもできる。偽物だと見破つた人も偉いが、それを信じて疑わなかつた人もすごい人なのだと思ふ作者は言いたいのかも知れない」

## 6. 第4講「厚行、死人を家より出だすこと」

### (1) 授業の実際

第1時は、範読と斉読とを繰り返して、目と耳と口で本文になじんだ後、「厚行は、どのような人物として描かれているのか」という題で初発の感想を書く(B5半分)。

第2時は、前時の初発の感想をクラス全員分まとめたもの(B4表裏)を読みあい、自他の読みの違いを意識する。

### (2) 生徒の反応と指導の方法

第1時の初発の感想から、主なものを抜粋する。(傍線は稿者)

- ・ 「厚行は物忌みを信じており、死人が悪い方角から出ることはよしとしないが、自分の門から出させるという、物事を考え分けることができるかしい人物として描かれている」
- ・ 「彼は、迷信などをとてもよく信じ、その迷信を信じて疑わない人で、そしてその迷信のためには何でも行う人。また、その迷信を信じていたおかげで、自分の

子孫も長生きをすることができた人」

- ・「厚行はとてもし義理堅く、平安時代の人とは違い物忌みなどをしない、迷信深くない人物として描かれている。また、自分の決めたことを最後まで貫いているので、意志が強い人物だと思う」
- ・「迷信というものを信じていないが、人のためとなればその人に合わせ、迷信とか関係なくその人のために全力で尽くすことができる人」
- ・「神や仏、陰陽道などを、自分が得するときは信じ、自分が損をするときは信じない、なかなかずるがしこい人物」
- ・「厚行は隣人の前では迷信を信じる態度を、家族の前は信じない態度を見せている。これは厚行が迷信で悪いとされることを隣人がせざるにすむように、わざと矛盾したことを言っているのだと思う。厚行は、本当は迷信深く、迷信に逆らわないよう臨機応変に動ける人物として描かれていると思う」
- ・「下野厚行は、自分の意見を押し通そうとする頑固な人物として描かれていると思う。周囲の人間はそうでもないが、彼だけは不吉な方角というものをかなり重んじており、それをゴリ押しで通している」

第2時では、「どれ(誰)が正しいのか」と借問することから始め、「みな同じ文章を読んでいるのに、どうしてこんなに意見が分かれるのか」という問いに進め、それぞれの意見と、根拠となる本文の対応を確認した。その結果、意見の違いは、「読者がどこに注目して読んでいるのか、どういう物語として読もうとしているのか」の違いによるということを明らかにした。

## 7. 第5講「宇治拾遺物語のまとめを書く」

学習のまとめとして、以下の要領で論文コンテストを実施した。

①「今回学習した四編の中から一つを取り上げ、古典を読んだの気づき、古典の読み方について分かったことをまとめる」という課題でレポートを書く(B5。これは、宿題として期限を定めての提出とした)

②レポートは、取りあげた作品毎に配列し、書き手の「顔」で選ばれないように、名前を消してエントリーナンバーを付してクラス全員分をプリントにして配布し、2時間+宿題で全員のレポートを読む。

生徒が取りあげた作品数は、学年全体では、

- ・柿の木に仏、滅ぶること…20
- ・獵師、仏を射ること…22
- ・尼、地蔵を見奉ること…53
- ・厚行、死人を家より出だすこと…27

であった。

③評価シート(B5)を配布し、「注目すべき視点・意見」として優れたものを3点選び、エントリーナンバーを記入して評価コメントを書く。

④「投票」結果の発表として、上位3～5名のレポートと、それに寄せられた評価コメントをプリントにして、互いの意見を読みあう。

以下にA組の入選レポートと、寄せられた評価コメントの主なものを紹介する。

**A組同点1位18票：「厚行、死人を家より出だすこと」**

- ・30「私がこの話を読んで最初に感じたのは、昔の人も現代の人も、実は考えている事は同じだということです。私達現代人は、「昔の人」といえば服装も文化も全部が違うというふうに現代人と区別しがちです。この物語では物忌み(現代人のいう迷信)をするかしないかが大きな問題となっていました。よく考えてみると私達だって彼らに負けないほど様々な占いなどを信じており、それに反した行動を無意識に恐れています。つまり、最初にも書いたように、昔の人と現代の人の考え方は、よく考えると同じ考え方なので、古典を読むときは「昔の話だ」と壁を作らずに、登場人物の立場に立って読むことが大切だと感じました」

評価コメント

- ・「他の人とは違い、昔の人も現代の人も「考えていることは同じ」と書かれているところに注目した。確かに私達も無意識のうちに占いなどを気にしてしまっている(自分の星座が最下位だと分かると、いい気がしない)。時代が違っても同じ人間なのだから変わらないという点に共感できた。
- ・「昔の人も現代の人も、実は考えていることは同じ」という意見には「はっ」としました。確かに私も占いや今日の運勢を気にしています。でも「千年前の人々はこんなバカなことを信じていたのか」と少し距離を置いていました。もしかしたら私達も千年後の人に同じ事を思われているかもしれません。長い年月を経ているとはいえ、人間は人間、そんなに変わりはない人だと分かりました。

**A組同点1位18票：「厚行、死人を家より出だすこと」**

- ・32「宇治拾遺物語を読んで、古典は現代と比べることで考えが深まる学問なのだと分かりました。例えば、この話では表面的に見ると厚行は物忌みを信じていないように見えますが、現代と比べると物語の時代では多くの人が仏教や陰陽道の考えに影響されています。すると厚行も少なからずその影響を受けているのではないかと考えられ、実は厚行は物忌みを信じているという結論につながってゆくのです。古典の時代と現代は大きく違います。だから現代と比べながら読むことでより多くのことを古典から学べるのではないかと思います

います。今の私達を見直すために古典があるのかもしれないと気付かされた学習となりました」

#### 評価コメント

- ・「私は「今の私達を見直すために古典があるのかもしれない」という部分が印象に残りました。1学期の頃、古典って何に役立たせることができるのだろうと思っていたことの答えとして、とてもいいと思いました。
- ・「古典は現代と比べることで考えが深まる学問だ」という部分です。例にも出されているように、厚行はその時代の基準で言えば仏や陰陽道を信じていない方かもしれませんが、今の基準で言うとかかなり信じている部類に入ります。この意見を読んで、その時代の価値観で見るとも大切だが、今と比較して見ることも、古典の楽しさだということが分かりました。

#### A組 3位14票：「尼、地蔵を見奉ること」

- ・29「古典を読むには物語が作られた当時の状況をよく理解することが大切であることが分かった。現代から約千年間もの違いがあれば、当然人々の考え方なども今とは違ってくる。そうした考えのずれもふまえて登場人物の気持ちや考えを読み取ることが大切になってくる。この話で尼は仏を心から深く信じ、会うことを願いつづけたため、夢が実現した。仏に対してひたすら捧げるという点は現代との視点の違いを感じるが、当時は当たり前のものであったのだろう。しかし、希望を持って夢の実現につなげるという考えそのものは現代と共通する部分である。考えや物事の捉え方などにずれがある中で、人間としての考え、在り方の共通することを見つけ、物語を読み進めてゆくことも重要である。

#### 評価コメント

- ・「古典を読むに当たって、「人間としての考え、在り方の共通するところ」が重要だと書いてあり、約千年も経っているから現在と違うとばかり思っていたので、大切なことに気付かしてくれたような気がしました。
- ・「考えや物事の捉え方などにずれがある中で、人間としての考え、在り方の共通することを見つけ、物語を読み進めてゆくことも重要」というのが良いと思います。今と昔では考え方が違う部分がたくさんあるから、それを理解した上で物語を読み進めることが大切だと、私は思っていました。しかしそれだけではなく、同じ人間としての考え、在り方の共通する部分を考えて読むことも大切だと気付かされました。

## 8. 終わりに

論文コンテストの結果を読み終わった学習の最後に、「選ばれた人の意見を読んで」というまとめを書かせた。

・僕は、選ばれた意見を読んで、それぞれの意見が筋が通っているのになぜここまで違うのかと最初は思いました。32さんは現代と古典は全然違うと言い、30さんは古典と現代は同じだと言い、29さんは共通する所と違う所があると言います。このように様々な角度から見た意見があつて、それは、自分の意見とも違うので、その意見を読むことで、自分の意見をよりよいものにできたと思いました。

・一位の二人が言っている古典とは、現代と同じか違うかという点で正反対だと思った。しかし、どちらも言っていることに共感でき、古典が分かったような分からないような、変な気持ちになった。しかし、29さんの意見は一位の二人の意見を少しまとめているようにも感じ、みんなとてもいいと思った。

特に、上掲「古典が分かったような分からないような、変な気持ちになった」という感想は、一連の学習活動がただの弁別作業やレッテル貼りに止まらず、自身の意見を更新する深まりのあるものであったことを示す、授業者にとっては最も好ましい反応であると捉えたい。

さらに、「友だちの意見を読んで、自分の意見を書く・コメントを加える」という学習のまとめとして、「ふさわしい評価の仕方・コメントの付け方」について書かせたところ、次のような意見があつた。

・僕がいいと思った評価に共通しているのは、自分の意見と比較して評価している点だった。例えば「自分とは違って」「自分は～と思っていたが」などだ。つまり、人の意見を評価するということは、他人の意見をじっくり読むだけでなく、自分の意見もじっくり読み、二つを比較することで、それによりよい批評ができるだけでなく、他人の書き方や意見を自分のものにすることができることだ。

・自分の選んだ文を、自分なりの視点でまとめ、書いた人がまた新たな発見をするようなコメントは、とてもいいと思った。その文を書いた人が言いたかったことを、もう一度違う言い方で言い直したりしているのは、いいと思った。同じような内容の文でも、言い方が違えばまた違う視点が発見できそうだから。

今回の授業のねらいとした「みんなで「読み」を確認する」こと、他者の意見を基に自身の意見を更新することは、一定の成果をあげた。

一方で、時間がかかりすぎたことが大きな問題点である。通常の授業形態、一斉授業による読解の方式では、いくら中学1年生が相手でも説話4本に10時間もかからないし、また、かけない。生徒の主體的な読み、学習活動を導くための授業構成、教材編成について、試行を重ねてゆきたい。